

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520358
 研究課題名（和文） 近世方言資料の系譜における『物類称呼』の典拠に関する調査研究
 研究課題名（英文） Research for Origins of Dialect-Articles in “Butsurui-Shoko”
 研究代表者
 田籠 博（TAGOMORI HIROSHI）
 島根大学・法文学部・教授
 研究者番号：30032642

研究成果の概要：

本研究は最初の全国方言集、越谷吾山編『物類称呼』の方言記事がどのような先行書から記事を集めたものかを追究し、近世における方言資料の系統の中に位置づけようとしたもので、『かたこと』系統書・『和漢三才図会』・本草学関係書・辞書（節用集）などから方言記事を抽出し、『物類称呼』の関係記事と比較対照しながら典拠関係を考察した。研究の成果は注釈の形で巻一・二について研究成果報告書として公表した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	600,000	0	600,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	360,000	2,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：『物類称呼』, 方言語彙, 本草書

1. 研究開始当初の背景

わが国最初の全国方言集『物類称呼』(1775刊)を編むために編者越谷吾山がどのような資料から方言記事を収集したのかについては、先行研究者によって、本文中に書名が見えるものを中心に検討が行われてきた。

すなわち、野必大『本朝食鑑』(1697刊)、寺島良安『和漢三才図会』(1713序)、貝原益軒『大和本草』(1709刊)、直海龍『広大和本草』(1759刊)、平賀源内『物類品隲』(1763刊)及び新井白石『東雅』(1719成)との間で具体的な類似記事の指摘がなされてきた。後

に節用集の一本である山本序周『男節用集如意宝珠大成』(1769刊)が加えられて、新たな典拠の可能性が高いとされてきた。

しかし、その収録内容の広範さや全国に跨る地域的な広さを考慮すると、従来の典拠の調査は必ずしも十分とは言えず、また記事の相互対照による典拠関係の解明が行き届いているとも言えない段階にある。

書名が見える『本朝食鑑』や『和漢三才図会』を例にとって各記事の一つひとつ比較してゆくと、該当記事以外にもこれら二書から取られた可能性が高いものが認められ、意外

に広範囲に典拠関係があるのではないかという推測が可能である。

『大和本草』その他の本草書についても、書名が添えられた箇所以外にも極めて類似した内容・表現を有する記事を数多く見出すことが出来ることから、同様に典拠の範囲は相当に広がったのではないかと考えられる。

近世の方言関係資料を概観すると、安原貞室『かたこと』系統書(重宝記などへ繋がる)、『大和本草』に始まる本草関係書に大別することが出来るが、それぞれ所収語の性質が若干異なる。すなわち、前者が広く一般語を含むのに対して、後者はもっぱら動植物の地方名という形で載るものである。『物類称呼』がこれらの系統の中でどのような先行書から方言記事を収集したのかは明らかにされないままである。

『物類称呼』の典拠を近世方言資料の系統に沿った形で調査することによって、その資料的性格を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、『物類称呼』刊行以前の近世方言資料を系統的・網羅的に調査し、それらから抽出した方言関係記事を整理して『物類称呼』と容易に比較・対照できる形式で一覧できるようにすることを第一の目的とする。

続いて、作成した一覧資料の各項目を検討することにより、編者越谷吾山がどのような編集方針で方言集を編んだのかという過程を明らかにしようとする。

そのために、パソコン上で利用できるデジタルデータとしての本文を作成し、そこに注釈的な形で先行書の記事を組み入れる作業を行う。

こうした基礎的な作業によって、初めて厳密な典拠関係の究明が可能となるのであり、また全面的な依拠なのか、複数の記事の取捨による選択的な利用なのかと言った、方言集編集の細部も事実に基づいて考察することが出来る。

近世方言資料を系統的に扱うことにより、上記の目的と並行して、『物類称呼』に結実する近世方言研究史といったものも、同時に浮かび上がってくることが期待される。

また、確定的ではないが、新たな典拠資料の発見につながる可能性も絶無ではない。

要するに、従来断片的に指摘された事実を広い範囲で見直し、新見を得ようとするのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究の調査は次の方法で行った。

一つは、安原貞室『かたこと』(1650刊)に始まり、その方言記事を継承する『浮世鏡』(刊年不明)、『重宝記大全』(1691刊)、『男重宝記』の方言記事を整理し、『物類称呼』と比較して典拠関係を検討する方法である。貞室と吾山がともに俳諧に携わることを勘案して、俳諧作法書や歳時記についても若干の調査を行った。

次に、いわゆる本草学関係書の系統的な再調査によって、既に指摘されている記事以外の典拠関係を見出すこと、及び新たな典拠たりうる本草書を発見することである。各本草関係書から方言記事を抽出・整理し、これを『物類称呼』の該当記事と対照する形で掲げることにより、相互比較を可能にした。

最後に、節用集類に含まれる方言記事の調査を可能な限り試みることである。この種の実用辞書に含まれる附録として、方言集のごときものが備わる可能性がある。

最初の方法を採った理由は、俳諧を嗜む者としての編者吾山は、『かたこと』系統書については日常的に親しんでいたため、ことさら書名を掲げる必要を認めなかった可能性が高いからである。言わば常識的な共通知識の源泉としてこれらを利用したことが想定される。

本草学関係書のうち、『本朝食鑑』と『和漢三才図会』は漢文体で書かれているため、必要な箇所を順次読み下し文に改める作業を行った。その他の書については、可能な限り版本を直接の資料として利用し、やむを得ない場合はマイクロフィルム資料をも活用した。

文献の調査は、複製本が入手可能な場合を別として、東京・愛知・岐阜・大阪の各地へ赴いて、国立国会図書館・国立公文書館内閣文庫・東京国立博物館史料館・岩瀬文庫・内藤記念くすり博物館・杏雨書屋などの所蔵資料を閲覧すると共に、必要な書の複写を依頼し入手した。典拠の可能性のある書籍類は広範に渡るため、効率的な調査を行うことは容易でなかった。

入手した資料から逐次的に方言記事を抽出してコンピュータに入力し、容易に検索できるように整理を加えた。

並行して、資料対照の元となる『物類称呼』については、改修本である須原屋本について全文をデジタルデータとして入力し、点検を重ねた上で基本となる本文を作成した。

こうして収集した方言記事を、『物類称呼』

の記事に注釈の形で加え、彼此対照しながら編者吾山が典拠記事をどのように利用し、編集していったのかについて考察を行った。

4. 研究成果

本研究による研究成果は、個別的な論文として発表するのになじまない点が多く、最終的な典拠注釈の形で行うことを当初から予定していた。

成果の一端を巻二動物の「鱚 なよし」(魚)で例示する。『物類称呼』記事の一部は次の通りである。

○なよし、○ぼら、○伊勢ごい、長崎に○まくちと云。勢州及尾張にて○めうぎちと云。

いせごいとは勢州鳥羽の海浜にて多く是をとり、又鯉に類するをもつて、いせ鯉と云。関西の称なり。東国には、ぼらとのみ呼也。又まくちとは、上古くちめといひし詞の遺りたる也。めうぎちとは名吉の音義を用たる也。

列挙された異名は、『本朝食鑑』(巻八)にナヨシ・イセゴヒ・ミヤウキチが、『和漢三才図会』(巻四九)にボラ・ナヨシ・イセゴイと伊勢方言ミヤウキチが、『大和本草』にも「最大ナルヲ、ボラ・ナヨシ・イセゴイト云。所ニヨリ方言カハレリ。」(巻一三)とある。また、後段の語源説は『本朝食鑑』の伊勢鯉ハ、勢州鳥羽ノ海浜多ク之ヲ採ル。形味鯉ニ類スルナリ。故ニ之ニ名ク。よること明らかで、「めうぎち」は『和漢三才図会』の

勢州人、名吉ト称ス〔奈与志之音義(7)用(2)矣。よると思われる。

ただ、長崎方言としての「まくち」は既知の本草書類に記事を見出すことが出来ないのであるが、本研究で新たな典拠資料として見出した向井元升『庖厨備用倭名本草』(1684刊)巻八に

○元升曰、ナヨシハ其類多シ。俗ニボラト云、イセ鯉ト云。肥前ニテ、マクチト云、又シクチト云。

という記事があり、肥前方言のマクチが載っている。元升が長崎出身であることから肥前を長崎に改めたのは、『和漢三才図会』による記事を編者寺島良安が大阪住であることから大阪方言とするのに同じである。

注意すべきは、先行の本草書に記事がある異名・方言名のすべてが『物類称呼』に採用されたわけではなく、『本朝食鑑』のハラブ

ト・エブナ、『和漢三才図会』のエブナ・コザラシエブナ・ハラブト、『大和本草』のエブナ・イナ、『庖厨備用倭名本草』の肥前方言シクチなどはなぜか漏れている。

編者吾山は先行書の方言記事をすべて取り込む形で編集したのではなく、一定の選択を加えている。その基準がどこにあったのかは不明だが、編集過程を考察する上で重要な事実となるのは疑いない。

本研究で見出した『庖厨備用倭名本草』と『物類称呼』との関係を考える一例を挙げる。巻三生植「独活 うど」の項である。

○西国にて○しかといふ。西国にては土中に有を○独活といひ、二三寸地上に生じたるを○うどといふ。尺以上になりたる物を○しかと呼。

『庖厨備用倭名本草』巻五に次の記事がある。

○元升曰く中略>西国俗ニ土中ニテ芽ヲ生シタルヲホリ取テ、ウド、イヒ、苗生シテ数寸ナルヲ。トセント云。土前ノ義ナリ。稍長シテ少シ枝葉アルヲ鹿好ンテ食ス。故ニ名ツケテ、シカト云。

比較すると、類似は明瞭でありながら、無視できない相違もある。つまり、土中にある時の呼称が「どつくはつ」と「ウド」、芽を出した時が「うど」と「ドゼン」、尺ほどに生長した時が「しか」と「シカ」で、最後を除いて食い違っている。

確定的な見解ではないが、恐らくこれは編者吾山の何らかの誤記に由来する誤りではないだろうか。「ドゼン」を誤って「独活」と誤記したため、土中の名称の「ウド=独活」と区別しがたくなったため、それを音読して「どつくはつ」という無理な語形を作り上げたのではないか。

1730年代に作成された『筑前国産物帳』によれば、菜類「しかな」に次の異名が載っている。

しかといふ。
小なるめだちを、うどといふ。
めだちの漸長せるを俗に、とうせんといふ。

生長名が「しか」、芽立ちを「うど」、やや生長して「どうぜん」というのは、『庖厨備用倭名本草』の記事を裏づけるものである。

従って、上記の推測が事実だとすれば、『物類称呼』が記載する方言記事の中には、必ずしも全面的な信頼を寄せることが出来ないものが存することになる。こうした検討を重ねることは、『物類称呼』の資料的価値を貶めるためではなく、それを批判的に受容し、

正しく利用するために必要な作業である。無批判な利用はかえってその価値をあやまらせるものとなる。

『物類称呼』の典拠記事を一覧することによって編者吾山の方言記事収集範囲と記事利用の態度が明らかになることで、本書の方言辞書としての意義について、改めて考える必要のあることを指摘できるのは、本研究による一つの成果と考える。編者は必ずしも自己の調査によって編集材料を得たのではなく、先行書に大きく頼る所があったのであり、時には誤読や誤記に基づく誤りも確かに存在し、その利用には慎重な姿勢を要することになる。

遺憾なことに、本研究による調査にもかかわらず、現段階では巻五言語の各記事について明白な典拠を見出し得なかった。「伊勢白子」「肥前唐津」など特定の地名が重出することから、編者吾山が独自に収集したことを積極的に立論する研究者もあるが、本研究の結果ではその是非を論じることは出来ない。

典拠記事の整理を終えた巻一・二に関しては、研究成果報告書として別に公刊したことを添記する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田籠 博 (TAGOMORI HIROSHI)

島根大学・法文学部・教授

研究者番号：30032642

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：